

アメリカの文学作品と英語表現指導
Teaching English Expression through American Literary Works

能 勢 卓

福岡女学院大学 教職支援センター
教育実践研究 第8号 抜刷

(2024年3月)

アメリカの文学作品と英語表現指導*

Teaching English Expression through American Literary Works

能 勢 卓

0. はじめに

Jonathan Culler (2001 : pp. 39-40) が「文学作品は記号過程の最も興味深い事例」であり (Literature is the most interesting case of semiosis)、「文学によって人は意味の不確定性の問題に直面させられる」 (Literature forces one to face the problem of the indeterminacy of meaning) と指摘し、さらには「どのような形態であれ、文学は意味作用とは何であるかを探求し、そしてその意味作用について深く考察し続けるものである」 (literature is itself a continual exploration of and reflection upon signification in all its forms) と述べているように、文学作品が言語表現の宝庫であることは多くの人が認めるところである。しかし日本の英語教育の実情に目を向けると、この四半世紀の間にアメリカやイギリスの文学作品が英語教育の教材として敬遠されるようになり、さらには実践的コミュニケーション能力重視の風潮も重なり、文学作品は文学を学ぶ学生が読むものと区別されつつあるのが現在の状況とも考えられる。¹ その一方で斎藤その他 (2004 : p. 6) において、「今の英語教育が、昔のいわゆる教養英語に対する反発から、極端な実用コミュニケーション中心主義の流れになりすぎているのではなかろうか……英語でコミュニケーションをしていれば英語が使えるようになるというような幻想」が蔓延しているとの指摘がなされているように、英語教育における実践的コミュニケーション力重視と文学離れの関係を批判的に考察する研究も行われている。

文学作品を英語教育において活用することに関しては、これまで様々な検証がなされてきた。Maley (1987) は詩や歌はリズムカルであるので記憶に残りやすく言語習得に有効であること、

* 本稿は、日本英語表現学会第52回全国大会 (2023年12月3日、於：福岡女学院大学) におけるシンポジウム (文学作品と英語表現指導) での発表内容をもとに、加筆・修正を施したものである。

¹ 江利川 (2004 : p. 15) は「日本の英語教育から、国策として、文学が一掃されつつある」と指摘した上で、日本の英語教育において文学作品がどのような経緯で避けられるようになっていったのかについて詳細な分析を加えている。昭和期の入試では Russel や Maugham などの文学作品から英文が出題されていたが、昭和34年の文部省 (当時) の通知により文学作品が敬遠されはじめ、1979年度からの共通一次試験より文学離れが決定的なものとなり、2003年の入試問題の状況では物語・小説は大学入試の英語の問題の中でわずか6.6%しか出題されていないことを明らかにしている。この調査分析から江利川 (2004 : p. 17) は、「入試に出なければ生徒は読まない。受験勉強で読まなければ、大学に入っても読めない。泣きつ面に蜂で、大学ではいま、読もうにも文学教材が手に入りにくい事態にまできている」と状況を憂いている。

そして詩の解釈には多様性が認められ、それ故その教育的効果として「それぞれの人の認識は種々様々であるので、お互いにいくらかでも話し合うことができる」(because each person's perception is different, an almost infinite fund of interactive discussion is possible) (Maley, 1987 : p. 94) と指摘している。教材としての文学作品について、斎藤が「文学は音のレベルから語彙の選択に至るまで緻密に計算されて成り立っている言語構造体ですから、ことばに対する感受性が養われる」(斎藤その他, 2004 : p. 6) と考えている一方で、海木は「文学教材の場合も、興味を示す子もいるだろうし、興味を示さない子もいるだろう。できるだけ大勢に興味を持ってもらうためにはどういう教材、どういう料理法をすればいいかということが課題になってくると思います」

(斎藤その他, 2004 : p. 14) と指摘している。² また安田 (2018) は、JACET 関西支部文学教育研究会の活動を踏まえつつ、文学を用いた英語教育の有効性とその価値について再検討を加え、学生の86.4%が語学クラスにおいて文学作品の活用を望んでいたことや、推理小説が学生の興味と学習意欲を喚起し、さらには「文章の細部にも注意を払う習慣を身につけさせ、無理なく会話表現や慣用表現、文法を修得させられる」(安田, 2018 : p. 8) と指摘してゐる。また倉林・河田 (2019) では文学作品を通して文法を学ぶことができることを、Hemingway の短篇を素材にとりながら詳述している。³ また脇本 (2021) はこの倉林・河田 (2019) の著作に言及しつつ、Dickens の *Oliver Twist* を用いて時制や語順などの文法項目だけではなく、省略法などのレトリックを学ぶことができることを指摘している。また後中 (2011) は学生の文学に対する意識調査を行い、その結果から、文学作品は英語教育において縮小傾向にあるが、アンケート結果から学生の多くが文学作品に興味を示しており、学生たちが文学から離れているわけではないことを明らかにしている。⁴

上に記した英語教育と文学作品に関する先行研究における指摘から、実践的コミュニケーション能力の育成を重視する傾向の中で文学作品は英語教育において敬遠されていたのだが、その文

² なおどのような文学作品が英語教育に適切であるのかという問題について、真野 (2004 : p. 28) は「人間という複雑な生き物と、その人間がつくる複雑な社会の複雑さを切り捨てない種類の文章をもっと読ませてほしい」と述べた上で、「やはり現代の標準的な英語に照準を合わせるべきだと思うから、いま生きている作家のものを中心とした現代の作品、それも使い勝手を考えればどうしてもエッセイや短篇に落ち着く」と指摘している。また上岡 (2004 : p. 30) は、「知的な英文を読み、論理的に英語で喋ることを最終目標とするなら、名文の音読は非常に有益だ。比較的新しく、文法的にもきちんとした文学作品から入れば、教養というだけでなく、実用にも結びつく」との見解を示し、その上で文体に味わいがある Hemingway の作品や Fitzgerald の *The Great Gatsby* を英語教育における音読の教材としてあげている。

³ 倉林・河田 (2019) では、Hemingway の短篇小説 “Cat in the Rain” を例に分詞が、また “A Day's Wait” を例に不定詞が、そして “The Sea Change” を例に法助動詞の “can't” と “won't” の意味や認識の違いが学べるようになっている。

⁴ 後中 (2011) において学生へのアンケート調査は2008年度と2009年度に実施されている。2008年度の事前調査における文学作品が好きか嫌いかを問う設問では、232名の被験者の62.07%が好きを選択し、嫌いが34.05%、そしてどちらでもないが3.88%であった。また2009年の調査では、授業において英詩を取り上げる前と後にアンケートが実施され、この2009年の最初のアンケート (被験者数: 95人) では、好きが68.42%、嫌いが24.21%、どちらでもないが7.37%、そして2009年度の2回目のアンケート (被験者数: 99人) では好きが80.8%、嫌いが13.13%、どちらでもないが6.05%であった。

学作品が英語教育の領域において教材としての価値が再評価されている面があると考えられる。以上のような議論を踏まえ、本稿において、筆者が福岡女学院大学（以下「本学」と略記）において担当している「アメリカ文学」の授業を例に取り、本学の学生がアメリカの文学作品を通して英語表現をどのように学び、また取り上げた作品に対してどのような反応を示したのかについて検証し、アメリカの文学作品の教材としての可能性について考察を加えていくこととする。そこで次のセクション1では、筆者が「アメリカ文学」の授業において実践的に導入している3つの手法（文法や語彙の意識づけのためのクイズ問題、英文読解活動での解説方法、シンクロ・リーディング）について取り上げ、その上で授業で実践している手法に学生たちがどのような反応を示したのか、学生たちのコメント内容を通してその効果について分析を加える。そしてセクション2において、「アメリカ文学」において取り上げた作品を学生たちがどのように理解し、解釈したのかについて、学生たちが記述したコメントの内容を分析し、英語教育におけるアメリカの文学作品の教材としての有効性について検証を加えていく。

1. 「アメリカ文学」の授業において実践的に導入している手法

筆者が担当している「アメリカ文学」の授業では実際にアメリカの詩やエッセイ、そして小説や演劇作品の一部を取り上げているが、この講義においてはアメリカの文学作品を「アメリカ文化の営みの一つのあらわれ」として位置づけている。その上で授業の展開において、学生たちがアメリカの文学作品を実際に読んで理解するとともに、それぞれの作品の言葉の音の響きを感じたり、その作品からどのようなメッセージを読み取れるかを考える機会が得られるように配慮した。

「アメリカ文学」の講義では文学作品を教材として取り上げているが、文学作品以外の英文テキストと同様に、文学作品を授業の中で取る上げる場合も英文の内容を理解するには、英文の中で使用されている語彙やセンテンスの文構造、そして文法項目の理解は不可欠であり、その上で各センテンスをチャンク単位で理解していく必要がある。またこの授業は文学作品を取り上げてはいるが、学生たちが綺麗な日本語訳を作れるようになることを授業の目的とはしておらず、それぞれの作品の英文をチャンク単位で適切に理解し、パラグラフや作品全体から産出されるメッセージがどのようなものか、そしてそのようなメッセージが具体的にどのセンテンスのどのような表現から読み取れるのかについて考えることを重視した。またこの講義で取り上げた作品は、アメリカの文学史にその名を残すほどの人物が書いた文章であるので、多くの場合は見事な文章になっていることが多く、それゆえそれぞれの作品の英語の音の響きに意識を向けさせるために、また何度も声に出して読むことで英文理解における音韻符号化の処理負荷が低減されることで英文そのものへの理解も促進されることを期待し、シンクロ・リーディングの活動も取り入れた。

「アメリカ文学」の授業において実践的に導入した手法の概要は上記のようなものであるが、授業の中でアメリカの文学作品に取り組んでいくにあたりそれぞれの手法をどのようなプロセスで活用したのかについて、次の1.1において語彙や文法項目への意識づけのために用いているクイズ形式の問題の使用とその後の英文読解作業について取り上げていく。そして続く1.2において、授業の中で取り入れたシンクロ・リーディングの活動について、その実践の目的と実施方法について言及した上で、学生のコメントを引用しつつその効果についても考えていくこととする。

1.1 講義の中で取り入れた語彙・文法クイズと英文読解活動

次の図（1）は、「アメリカ文学」で Henry David Thoreau の *Walden* の “Where I Lived, and What I Lived for” の一部を取り上げた授業において、実際に英文読解活動に入る前に Google Form で出題した英文穴埋め形式のクイズである。授業においてこのようなクイズ問題を課す際は、学生たちに、カッコの部分にどのような単語を入れれば問題文に付けられている日本語の意味を表す英文になるかを考えるように促している。

図（1）

(1)以下の日本語の訳文になるように、カッコ内に入る単語を選んでください。

「日が昇るにつれて、湖が夜の間身に纏っていた霧という衣を脱ぎ捨てていくと、あちらこちらで少しずつ柔らかなさざ波や滑らかに光を反射する湖面が現れてきた。その一方で、霧は幽霊のように森の中のあちこちの方向へとこっそりと散っていき、それはまるで夜の密会から解散していくようであった。」

(出題のためにこのセンテンスは幾つかに分けて出題します。)

as the sun (), I saw it(=pond) throwing off its nightly clothing of (), and here and there, by (), its soft ripples or its smooth reflecting surface was revealed, while the mists, like ghosts, were () withdrawing in every direction into the woods, as at the () up of some nocturnal conventicle.

紙幅を節約するために設問の全てを掲載することを避けるが、この問題には以下のような単語が選択できるように作られている。

選択肢 arose degrees impression mist stealthily breathing

このような語彙・文法問題を学生に課した理由は、英文読解という活動においてあえて最初に日本語の意味内容から英語表現を考えるというアプローチをすることで、その後に行う英文読解活動をするときに語彙や文法に意識が向くようになり、英文を理解する際のヒントになると期待したからである。上記の図（1）の例では、一つ目のカッコは「太陽がのぼるにつれて」の部分の動詞が問われているので、解答としては“arose”であるが、この問題を解くことで“as S' V...”の部分が英文読解活動を行う際に簡単に理解できると期待できる。また二つ目の“nightly clothing of mist”のカッコ問題では、脱ぎ捨てる対象である of 句の理解に、そして三つ目のカッコの“by degrees”は「徐々に」という句表現を理解するのに役立つと考えられる。実際学生の中に

图 (3)

far above the surface of other lakes, // and, as the sun arose, / I saw it
 □□上□□□□表面□□他の湖□□□□するに□□上がる……→pond
 □□□□□□→湖面□□□□□□□□□□つれて□□□□□□□□□□それは=湖

throwing off its nightly clothing · of · mist, and here and there, · by degrees,
 脱ぎ捨てる□□夜の間□□着ていた□□霧□□□あちらこちらで·少しずつ/徐々

its soft ··· ripples or its smooth ··· reflecting surface · was revealed,
 · 柔らかい · さざ波□□滑らか(に) · 光を反射 · 湖面□□現れてくる
 する□□□□表面□□reveal 明らかにする/示

while the mists, like ghosts, were stealthily withdrawing in every
 一方□□□霧□□□□幽霊□□□こっそりと□散っていく□□□あらゆる
 □□□□□□□□□□□□□□□□□□□□退場する
 direction into the woods, · as ····· at the breaking up of some nocturnal ·
 方向□□□□□森□□まるで~のように□□□□解散□□□□□□夜の

conventicle. ··· The very dew seemed to hang upon the trees later into
 密会/秘密集会□□□□かすみ□□□□□しがみつく□□□□遅くまで

the day than usual, · as on the sides of mountains.
 日中□□□いつもより□山の中腹にあるのと同様に

この図（3）の例の場合、一つのセンテンスが非常に長く、本学の学生がこの英文を読んで理解すること自体に難しさを感じる可能性があると考えられる。またそのような文章であれば何らの教育的指導も行わないのであれば、たとえ見事な文章で書かれた文学作品であっても、学生が積極的に読むことも難しくなると考えられる。そこで語彙や文法に意識を向けさせた上で、図（3）のような資料を提示しながら語彙や文法事項の解説をし、学生たちにチャンク単位で英文を読み、取り上げた作品の英文の内容を理解できるように指導した。またこのような難易度の高い英文を取り上げた場合、学生たちが自宅学習において難しさを感じる文章を音読してくれることを期待することは難しくなるので、授業において取り上げた文学作品の一部を声に出して読む活動を導入することで、学生たちに英語を音読することの効果に気づかせるようにした。そこで次の1.2において、講義の中で取り入れたシンクロ・リーディングの活動について取り上げることとする。

1.2 シンクロ・リーディングの活動のポイントとその効果

授業の中で取り入れた英文の音読活動は、既に述べたようにシャドーイングを実施する際にその過程で使用されるシンクロ・リーディングの手法を主に用いた。門田・玉井（2004）の音読やシャドーイングの活動の種類や練習プロセスに関する分析では、英文テキストを見ながら聞こえ

てくる音声とほぼ同時に声に出して読むシンクロ・リーディングについて、「シャドーイングがむずかしいと思ったら、まずシンクロ・リーディングを繰り返すことを勧めます」（門田・玉井，2004：p. 59）と記述され、また「テキストの意味をしっかりと確認しましょう」（門田・玉井，2004：p. 62）と注意喚起されている。この門田・玉井（2004）の指摘と「アメリカ文学」において取り上げている英文の難易度や受講生の英語力を勘案し、この講義においては、シンクロ・リーディングの手法を授業において導入することが妥当であると判断した。

またシャドーイングの目的や効果に関して門田（2007：p. 134）は、シャドーイングには次の2つの目的と効果があると考えている：（1）「音声知覚を自動化するシャドーイング」；（2）「語彙・文法規則を内在化させるためのシャドーイング」。まず（1）に関連して門田（2007：p. 135）は、音声インプットに基づいて音韻表象を形成し、それを声に出して発声するタスクを反復練習することで、「自動性（automaticity）」を獲得することができると指摘している。また（2）に関連して、「内語反復の効率化の結果、フォーミュラー連鎖（formulaic sequence）と呼ばれるチャンク（構文）を丸ごと記憶して内在化することができると考えている。この門田（2007）の指摘から、「アメリカ文学」の授業においてシンクロ・リーディングの手法を導入することで、学生たちの音声知覚の自動化を促進し、英文読解過程での音韻符号化のための負荷を軽減し、語彙・文法・意味・文脈理解の方に処理資源を活用することでリーディング能力の向上に貢献するとともに、チャンクの内在化が期待できると考えられた。

「アメリカ文学」の授業においてシンクロ・リーディングを実践する際の注意点としては、既に英文の意味内容は把握した状態であったとしても、学生たちにとって取り上げている作品の英文の難易度自体が難しい場合もあり、また英語のナチュラルスピードに慣れていない場合もあるので、音声速度を85%程度にまで下げ、シンクロ・リーディングの音声素材を容易なレベルから開始して、徐々に音声速度を上げていき、最終的に100%のナチュラルスピードでシンクロ・リーディングを実行できるように指導していった。⁵ そして1.1において提示した図（3）の *Walden* の “Where I Lived, and What I Lived for” の一節をシンクロ・リーディングの素材として活用したところ、学生たちは次のようなコメントを記している。

学生Aのコメント：

シャドーイングやリスニングをすることで、英文を読んでいるだけでは気づくことができなかったことに気づけました。英文を日本語にするときは単語だけを拾い上げが

⁵ なお門田・玉井（2004：p. 55）は、シャドーイングを行う素材としては「i-1」か「i-2」程度の容易な素材が適切であると指摘している（なおここで門田・玉井が使用している“i”という術語は Krashen（1985）が指摘する個々の学習者の学力レベルのことを指している）。

ちで、英文全体のリズムを読み取るのが難しいのですが、実際に発音された、ある程度長い英文を聞くと「この単語のイントネーションはこうだったんだ……ここは連音化するんだ」と様々な発見があります。

学生Bのコメント：

何回も繰り返して自分の意識するところに注意しながら音読することで、最後にただ聞くだけをしたときに最初とは全然違い、単語一つ一つがよく聞こえるようになり、文の意味理解しながら聞くことができた……英語を勉強するには耳と口と目をフル活用させないといけないんだなと思いました。

上記のコメント以外にもシンクロ・リーディングの活動に対する様々な意見が学生から出されているが、この二つのコメントが端的に示すように、授業において実施したシンクロ・リーディングの活動を多くの学生が非常に前向きに捉えて取り組むとともに、その効果を実感していると考えられる。

2. アメリカの文学作品に対する学生の反応：Emily Dickinson と Robert Frost を例に

前節のセクション1において「アメリカ文学」の授業において導入している手法について言及してきた。そこでこのセクション2では、学生たちが読解・音読活動の後に記述したコメントの内容に分析を加えていくことで、アメリカの文学作品が教材としてどのような効果があったのかについて検証を加えていくこととする。そこでまずアメリカの女流詩人 Emily Dickinson の詩に対して学生たちがどのようなコメントを記述したのかについて取り上げていくこととする。教材引用の(1)は、図(2)で示した Emily Dickinson の“If I Can Stop One Heart from Breaking”である。

教材引用 (1)

IF I can stop one Heart from breaking,	一つの心が壊れていくのを止められるなら、
I shall not live in vain;	私が生きるのも無駄ではない
If I can ease one life the aching,	一つの命の痛みを癒せるなら、
Or cool one pain,	一つの苦しみを静められるなら、
Or help one fainting robin	一羽の弱ったコマドリを
Unto his nest again,	再びその巣に戻してやれるなら、
I shall not live in vain.	私が生きるのも無駄ではない

(Emily Dickinson, “If I Can Stop One Heart from Breaking,” p. 433)

「アメリカ文学」の授業において例年 Emily Dickinson の詩を 6 篇から 8 篇ほどを取り上げている。授業において Dickinson の詩の中で最も興味深く感じた作品を選び、その詩の魅力とその根拠となる詩の中で使われている魅力を感じた表現についてコメントを書くように課題を出した。このコメント課題の目的は、ある作品が魅力的である（またはそれとは逆に面白くないなど）といった、ある種の見解を示すときは、その根拠となる具体的な事実を示す必要があることを学生たちに意識させることでもあったので、詩に対するコメントを書く場合でも、学生たちに自分たちの抱いた印象や見解の根拠となる要素を作品の中から見出し、その一部を引用・言及してコメントを書くように指導した。そして上記の（1）の Dickinson の詩に関して、学生の一人は「この詩の中ではまず one heart、その次に one life、one pain、one fainting robin と順番に出てきます。治すことが難しいことから、だんだんすぐにできるようなものへ移っているところが詩の魅力だと感じました」とのコメントを記述し、また類似の指摘ではあるが、もう一人の学生は if 節の中で使用されている動詞に着目して次のようなコメントを記している。

学生Dのコメント：

If～の文の中で stop, ease, cool, help と 4 つありますが、最初の文から後半に行くにつれてどんどん身近な規模のものになっていき、こんな小さな行動でも生きる意味はあるんだよと言われているようだなと感じました。また、文頭が一つのもので統一されていることから、たくさんじゃなくて1つでいいという意味も込められているのかなと思いました。

この二人の学生のコメントの内容は、ブルース・ボード（2012：p.83）が、人生の広がりも制限され、自分にとっての善とは何かと悩み、さらに他者から自らの習慣が奇妙だと思われることを感じつつも、Dickinson が自分の思いと感情を、「一つの心が壊れていくのを止めることができれば」それは「むなしくは生きない」ということだという、自らの詩の言葉に表れ出た Dickinson の同情・共感・連携の感覚の強さに通底する考え方であるとも言える。

また Dickinson の他の詩について学生が記述したコメントについて言及しておく、以下の教材引用の（2）の詩についても学生たちは様々なコメントを記している。

教材引用（２）

Tell all the truth but tell it slant —	真実をそっくり語りなさい　しかし斜めに語りなさい
Success in Circuit lies	成功はまわり道にあります
Too bright for our infirm Delight	私たちのひ弱な喜びには明るすぎます
The Truth's superb surprise	真実の持つ至高の驚きは
As Lightning to the Children eased	子どもたちも稲光が怖くなくなるように
With explanation kind	丁寧に説明をすると
The Truth must dazzle gradually	真実はゆっくりと輝くのがよいのです
Or every man be blind —	さもないとみんな目がつぶれてしまいます

(Emily Dickinson, "Tell All the Truth but Tell It Slant," pp. 506-7)

この詩に関して多くの学生がコメントにおいて、Dickinson は彼女独自の発想を言語化することが巧みであると指摘しており、そのうちの一人の学生は、この詩の魅力の「理由は“Too bright for our infirm delight”という部分です。ひ弱な喜びという陰と陽のように反対の意味で表現されているところに惹かれました」と指摘している。また別の学生はこの詩の中で用いられた表現について以下のようなコメントを記している。

学生Eのコメント：

1 番好きな詩は、“Tell all the truth but tell it slant” です。私に言われているような感覚になりました。真実は正面から語らないといけないけど、「意見が伝わるように優しく真実を語る」ということを「斜め」“slant”と表現していると私は考えました。この詩は聞いている私たちにも沢山の想像をさせてくれるし、考えさせてくれるので好きです。ディキンソンの独特な発想や表現を読むのはとても楽しかったです。

上記の学生のコメントは、Miller (1987 : p. 184) が Dickinson は読める人を明るすぎる真実の光から、そしてそれは同時に Dickinson の強すぎる言葉の力から守るために “slanting language” を用いて詩を書いているという指摘に通じる考え方であると言える。

また20世紀アメリカを代表する Robert Frost の詩も例年数篇取り上げている。Frost の “Stopping by Woods on a Snowy Evening” は彼の詩の中でもとり分け有名な作品であり、弱強四歩格で第1から第3スタンザまでは各行の脚韻を aaba, bbcb, ccdc と展開し、第4スタンザで dddd と揃えて完結させる構成が非常に高く評価されている。

教材引用（３）

Whose woods these are I think I know.	この森の所有者はだれか、わたしはわかっているつもりだ。
His house is in the village though;	とはいえ、彼の家は村の方にある
He will not see me stopping here	だから彼にはわからないだろう、私がここで立ち止まっているのは
To watch his woods fill up with snow.	雪の降り積もった森を眺めるために
My little horse must think it queer	わたしの小さな馬は変だなと思っているに違いない
To stop without a farmhouse near	近くに農家もないところに立ち止まるのを、
Between the woods and frozen lake	森と凍った湖のあいだの場所に
The darkest evening of the year.	それも一年じゅうで一番暗い夕べに。
He gives his harness bells a shake	馬は馬具についた鈴を一ふり鳴らす
To ask if there is some mistake.	何か間違ったことはないかと尋ねるように
The only other sound's the sweep	あたりではかに聞こえる音は
Of easy wind and downy flake.	緩やかな風と柔らかな雪ひらの音だけ
The woods are lovely, dark and deep.	森は美しく、暗くて深い。
But I have promises to keep,	だがわたしには果たすべき約束がある
And miles to go before I sleep,	眠るまでにまだ数マイルか行かねばならぬ、
And miles to go before I sleep.	眠るまでにまだ数マイルか行かねばならぬ。

(Robert Frost, "Stopping by Woods on a Snowy Evening," pp. 207-8)

Frost の詩が自然を背景に人間模様が生み出すドラマを描いていることを、研究者たちがしばしば指摘しているように、学生の一人はこの詩の魅力について以下のように記している。

学生 F のコメント：

“frozen lake”、“The darkest evening of the year”、“The only other sound's the sweep of easy wind and downy flake” など、静けさを感じる森の情景描写が続いているところが美しいと思いました。そして森の様子がありありと浮かぶほどの詳しい描写がされている反面、最後には“But I have promises to keep, and miles to go before I sleep”と、語り手が置かれている状況を想像させるような曖昧な表現がされており、最後の最後で読者はこの語り手のバックグラウンドに思いを馳せることができるのがとても物語性があって素敵だと思いました。

この “Stopping by Woods on a Snowy Evening” を書いた Frost 自身は、詩について次のような見解を述べている。

there are many other things I have found myself saying about poetry, but the chiefest of these is that it is metaphor, saying one thing and meaning another, saying one thing in terms of another, the pleasure of ulteriority. Poetry is simply made of metaphor. So also is philosophy—and science, too, for that matter, if it will take the soft impeachment from a friend. Every poem is a new metaphor inside or it is nothing. And there is a sense in which all poems are the same old metaphor always.

(Robert Frost, “The Constant Symbol,” p. 786)

気がつけば詩について色々なことを述べてきましたが、その中で一番大事なことは、詩はメタファーだということです。つまり一つのことを言うことで、別のことを意味している。一つのことを別の言葉で表すという、隠された喜びなのです。詩というのはまさにメタファーの塊なんです。そういうことは哲学や科学にも言えると思います。そんな風に言ってしまうと、どこからかやんわりご指摘を受けてしまうかもしれませんね。でも詩というものは全てその中にそれまでにないメタファーを含んでいるものです。そうでなければ詩の意味がありません。でもそれと同時に、全ての詩は昔から使われている同じメタファーだという見方もできます。

このような Frost の言葉を見ると、森での一場面を描いた詩の中に本学の学生が物語性を見出していることは、Frost が詩の機能として重視していた、一つのことを言うことで別のことを伝えようとするという、この詩に込められたメタファーをこの学生が読み取っているとも考えられる。

3. まとめと今後の方向性

本稿において、筆者が担当する「アメリカ文学」の講義を例に取り、文学作品を大学における英語教育の素材として使用することの有効性について検証を加えてきた。セクション1.1に示したように、本学の学生たちの場合、読解活動の前にカッコ穴埋め式クイズ問題を通して当該テキストの語彙・文法などの英語表現に着目するきっかけを与えることで、その後の英文読解活動において内容理解が促進されていると考えられる。また1.2に示したように、シンクロ・リーディングを取り入れたことにより、単に英語の音声面に意識が向けられるというだけではなく、英文全体のリズムを意識することや、文の意味理解をしながらリスニングをするなど、学生たちが様々な面でこの活動を前向きに取り組んでいたことがわかる。そしてセクション2に示したように、学生たちが自分達が読んだ作品に関して、その中で使用されている英語表現を具体的に参照・引用しつつ、作品の魅力について自らの見解を記述していることも見てとることができた。

セクション1と2の検証から、「アメリカ文学」の授業において取り上げた文学作品は、語彙や文法といった高校までの英語教育で学習した内容を再確認する機会を提供するだけでなく、実際に声に出して英語を読む活動から英語の音声面や英文への全般的理解につながる活動も実施でき、さらには一つの英文テキストの文字列が表すおもての意味とその文字列から読み取れる書き

手のメッセージについて考えてみる機会も与えてくれると考えられる。このコメントを記述する活動は、英語で書かれた一つの文章を素材に取り、適切な根拠を対象となる英文の内容や表現から引き出しつつ自らの見解を記述する機会を与えており、その点で学生たちに思考力の強化と思考の言語化という面でプラスの効果が期待できると考えられる。

以上の点を勘案すると、文学作品は、大学における英語教育の教材として有効な素地を残した素材であると考えられる。今後取り組みに加えていくべき授業活動での実践方法としては、Maley (1987: p. 101) が指摘している作品内の “happy and sad words,” “strong and weak words,” “warm and cold words” の抽出作業などを取り入れることで、アメリカの文学作品を用いた英語表現指導をさらに充実させていく必要があると考えられる。またこのような実践手法の改善だけではなく、文学作品と英語表現指導の有効性をさらに検証していくためにも、学生たちのコメントの記述内容の特徴を分類し、それぞれの特徴の傾向を分析していく必要があると考えられる。

引用・参考文献

- 江利川晴雄「英語教科書から消えた文学」『英語教育』Vol. 53 No. 8 東京：大修館書店，2004年10月：pp. 15-18
- 後中陽子「英語教育における文学作品導入の調査報告ー英詩の場合」『JACET 関西紀要』京都：大学英語教育学会関西支部，2011：pp. 74-85
- 門田修平『シャドーイング・音読と英語習得の科学』東京：コスモピア，2012
- 門田修平、玉井健『決定版英語シャドーイング』東京：コスモピア，2004
- 上岡伸雄「＜中・高・大＞音読させたい名文集」『英語教育』Vol. 53 No. 8 東京：大修館書店，2004年10月：pp. 30-33
- 亀井俊介（編）『ディキンソン詩集：対訳』東京：岩波書店，1998
- 亀井俊介、川本皓嗣（編）『アメリカ名詩選』東京：岩波書店，1997
- 倉林秀男、河田英介『ヘミングウェイで学ぶ英文法』東京：アスク出版，2019
- 斎藤兆史「日本文学を英訳で読むと何が見えるか」『英語教育』Vol. 53 No. 8 東京：大修館書店，2004年10月：pp. 38-39
- 斎藤兆史、中村哲子（編注）『English through Literature（文学で学ぶ英語リーディング）』東京：研究社，2009
- 斎藤兆史、室井美稚子、中村哲子、海木幸登「文学こそ最良の教材：英語の授業にどう活かすか？」『英語教育』Vol. 53 No. 8 東京：大修館書店，2004年10月：pp. 6-14
- 高橋和子「＜高・大＞これまで使ってみた・これなら使える 文学教材」『英語教育』Vol. 53 No. 8 東京：大修館書店，2004年10月：pp. 34-37

- 古川隆夫『ディキンソンの詩法の研究：重層構造を読む』東京：研究社，1992
- ブルース・ボウド「もし一つの心が崩れるのを止めることができたなら」『空よりも広く：エミリー・ディキンソンの詩に癒された人々』シンディー・マッケンジー、バーバラ・ダナ（編）大西直樹（訳） 東京：彩流社，2012：pp. 79-83
- 真野泰「文学を教材にした授業実践（大学）」『英語教育』Vol. 53 No. 8 東京：大修館書店，2004年10月：pp. 27-29
- 安田優「文学作品を活用した英語教育への提言」『JACET 関西紀要』京都：大学英語教育学会 関西支部，2018：pp. 1-10
- Brower, Reuben A. *The Poetry of Robert Frost: Constellations of Intention*. New York: Oxford University Press, 1963.
- Capps, Jack L. *Emily Dickinson's Reading 1836-1886*. Cambridge: Harvard University Press, 1966.
- Cox, James M. (ed) *Robert Frost: A Collection of Critical Essays*. Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1962.
- Culler, Jonathan. *The Pursuit of Signs*. London: Routledge, 2001.
- Dickinson, Emily. "If I Can Stop One Heart from Breaking." *The Complete Poems of Emily Dickinson*. Ed., Thomas H. Johnson. Boston: Little Brown and Company, 1960: p. 433.
- . "Tell All the Truth But Tell It Slant." *The Complete Poems of Emily Dickinson*. Ed., Thomas H. Johnson. Boston: Little Brown and Company, 1960: pp. 506-7.
- Ferlazzo, Paul J. *Critical Essays on Emily Dickinson*. Boston: G. K. Hall, 1958.
- Finnerty, Paraic. *Dickinson's Shakespeare*. Amherst: University of Massachusetts Press, 2006.
- Frost, Robert. "Stopping by Woods on a Snowy Evening." *Robert Frost: Collected Poems, Prose, and Plays*. Eds., Richard Poirier and Mark Richardson. New York: The Library of America, 1995: pp. 207-8.
- . "The Constant Symbol." *Robert Frost: Collected Poems, Prose, and Plays*. Eds., Richard Poirier and Mark Richardson. New York: The Library of America, 1995: pp. 786-91.
- Grabher, Gudrun., Roland Hagenbüchle and Cristanne Miller. (eds) *The Emily Dickinson Handbook*. Amherst: University of Massachusetts Press, 1998.
- Krashen, Stephen D. *The Input Hypothesis: Issues and Implications*. London: Longman, 1985.
- Maley, Alan. "Poetry and Song as Effective Language-learning Activities." *Interactive Language Teaching*. Ed., Wilga M. Rivers. Cambridge: Cambridge University Press, 1987: pp. 93-109.

- Miller, Cristanne. *Emily Dickinson: A Poet's Grammar*. Cambridge: Harvard University Press, 1987.
- Oberhaus, Dorothy Huff. *Emily Dickinson's Fascicles: Method and Meaning*. University Park: Pennsylvania State University Press, 1951.
- Patterson, Rebecca. *Emily Dickinson's Imagery*. Amherst: University of Massachusetts Press, 1979.
- Thoreau, Henry David. "Where I Lived, and What I Lived for." *Walden and Civil Disobedience: Authoritative Texts Background Reviews and Essays in Criticism*. Ed., Owen Thomas. New York: Norton. 1966: pp. 54-66.
- Wagner-Martin, Linda. *Emily Dickinson: A Literary Life*. London: Palgrave Macmillan, 2013.

